私の工夫

大好き！わたしたちの町！
～教科・領域・学校行事との関連を通して～

岡山市立石井小学校
教諭　児山　力

1　はじめに

「うさぎ　おいし　かのやま～♪」と歌い始める童謡「ふるさと」。高齢者との交流など、いろいろな場面で歌うことがあるが、果たして、児童が思い描く「ふるさと」はどのようなところなのだろう。

私が勤めている石井小学校の児童数は３６４名（７月末現在）で、イマージョン教育を受けるため、学区外から通学する児童が半数を超えている。

学区外の児童にとっては、二つの地域に所属していることになる。児童にとって石井の町はどのような存在なのであろうか。生まれ育った地元ではないため、あまり関心がなく、地域行事に参加しようとする意欲が高くないのではないかと思われた。そこで、３年生の地域学習をどのように関連させて進めていくべきか検討し、今回の実践を行った。

まずは、通っている石井小学校の地域のことを学習し、最終的には自分たちが住んでいる地域に目を向けていってほしいと願い、学習過程を組んでいった。

2　取組の具体

（1）社会科を通して

１学期に学習する社会科は、まさに地域との出会いで、自分たちの通っている石井小学校の周りにはどのような建物・店があるか、土地はどのように利用されているか、どのような人が働いているかなどを調べる学習である。

その中で、学区の様子を俯瞰（ふかん）するため、屋上に上がってみたところ、「たくさん建物があるね」「あの大きな建物はなんだろう」と、児童は学区にあるものに興味をもち、主体的に調べようとする意欲をもつことができた。

（2）総合的な学習の時間を通して

その後、総合的な学習の時間では、「地域の自慢や魅力探し」を行った。

児童は、数ある施設の中で、奉還町商店街や、国際交流センター、岡山駅、坪田譲治子どもの館、ＮＨＫ岡山放送局などを選び、そこで働いている人々にインタビューをして分かったことをまとめていった。「奉還町商店街が昔からあって好きなんじゃ」と言うお店の方、「坪田譲治先生のことをみんなに伝えていきたいんよ」と言う子どもの館の方、働いている人のいきいきとした姿があり、地域のために働く姿を身近に感じることができた。

さらに、石井小学校の卒業生である、児童文学作家の坪田譲治先生についても調べた。書かれた作品を読んだり、関連する史跡（生家跡、子どもの館、えへん橋など）を探検したりすることで、石井の自然の美しさや町の情景が坪田譲治先生にとって、ふるさとのよき思い出となっていることが分かった。また、坪田譲治先生の存在や作品を伝え、守っていこうとする人々の働きも知ることができた。

活動を通して児童は、石井の町や地域の人たちのよさを感じ、自分たちの地域をすてきだな、大切だなと思う気持ちが高まっていった。

（3）関連的な道徳の学習を通して

総合的な学習の時間の中ではぐくんできた「地域の人はどうしてこんなに地域を大切にできるのかな」という課題意識をもって、要となる道徳の時間に臨んだ。

道徳の時間では、「わたしたちの後楽園」（価値項目4―（5）郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ）という資料をもとに、主人公の気持ちに寄り添いながら物語に浸っていった。展開前段では、後楽園の探検に行った主人公が後楽園のすばらしさを伝えようとしているボランティアの人たちを見て、家族と話をするところを中心場面として取り上げた。その時の主人公の気持ちを問うと、「地域のためにボランティアをするなんてすごいな」や「後楽園のことをもっと知ってもらいたいからしているんだ」などの思いが児童から次々と出てきた。

展開後段では、奉還祭や子どもの館の行事などに参加した経験を思い起こさせ、石井の町や地域の人のよさ、活動した楽しさなどを振り返ることができた。

終末には、ゲストティーチャーとして、奉還町商店街の「だんじり会」の方に来てもらい、だんじりを守り続けていくために苦労していることや地域に対する思いを熱く語ってもらった。

（4）学校行事を通して

11月の学習発表会では、学習したことをまとめて発表した。児童は、自分たちが調べた地域の自慢や魅力、地域への思いを自分たちの言葉でしっかりと伝えることができた。

最後の呼びかけでは、石井の町のすてきなところや自慢をたくさん見つけたこと、地域の人と温かくふれあったこと、地域の人はみんな、地域のことが大好きで大切に守り続けていることが分かり、うれしかったことなどを心をこめて言う姿が見られた。

3　おわりに

今回の実践を終えるにあたって、今までの学習を児童と振り返ったところ、「たくさんの人に石井の町のすてきなところを知ってもらうことができてよかった。これからは、自分の住んでいるところのよいところをもっと調べて、伝えていきたい。」と書いた児童がいた。

児童にとって今まで以上に石井の町が好きになり、さらに自分の住んでいる町のことに目を向け、活動に参加したいと思えるようになったことが、一番の成果であった。

大人になっても地域のことが好きであるということは、そこにいる友達や地域の人との関わりが温かく、その交わりの中で地域のよさである宝を共に残していきたいと思うからではないだろうか。

将来、児童が生まれ育った町を離れても、この石井の町のこと、自分の住んでいる地域のことを大切に思い、坪田譲治先生のように心の支えとして、また時には地域の応援団としての役割を果たせる大人になってほしいと願う。

坪田譲治先生の「心の詩碑」に「心の遠きところ　花静かなる　田園あり」と書かれている。

街中にありながらも、石井学区は坪田譲治先生の愛した「ふるさと」を今も残している。